

大学院派遣研修報告書

所属校	足立区立西新井中学校	氏名	関 裕 幸
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻 社会系コース
研究テーマ	中学校社会科歴史的分野における内容構成に関する研究 －「時代の特色の理解」を中心として－		

I. 研究の概要

本研究の目的は、中学校社会科歴史的分野において「時代の特色の理解」を重視した内容構成のあり方を明らかにし、「中世の日本」を事例とした内容構成案を提示することである。そのために、明治期以降の歴史教育における内容構成の特質と課題を考察し、さらに、現在の中学生の実態調査を踏まえることとする。

1. 歴史教育における内容構成の特質と課題

戦前期における歴史内容構成の特質を分析し、それをもとに時期区分を行った。戦前期における歴史教育の変遷を、内容構成の側面から時期区分すると、次の3期ととらえた。

ア. 天皇歴代史中心の内容構成期：1872（明治5）年－1881（明治14）年

イ. 紀事本末体中心の内容構成期：1881（明治14）年－1891（明治24）年

ウ. 人物中心の内容構成期：1891（明治24）年－1945（昭和20）年

そして、各時期の内容構成の特質は、その時期に定められた法令にある歴史教育の目標を受けているが、「時代」のまとまりという視点はみられないものであることが明らかになった。

また、戦後期については、中学校社会科で歴史的分野が成立した1955（昭和30）年以降を、学習指導要領の内容項目をもとに、次の4期に時期区分した。

ア. 社会構造史をもとにした内容構成期：昭和30年、昭和33年版学習指導要領

イ. 歴史の流れを重視した内容構成期：昭和44年版学習指導要領

ウ. 日本史中心の内容構成期：昭和52年版学習指導要領

エ. 国際関係を重視した内容構成期：平成元年版学習指導要領

そして、各時期の内容構成の特質は、その時期の学習指導要領に記述された社会科および歴史的分野の目標に基づいていることを指摘した。

次に、現行の中学校社会科歴史的分野の内容構成の特質について、平成10年版学習指導要領の内容項目から分析し、「日本の歴史の大きな流れを重視した内容構成」、「内容の厳選の視点に立つ内容構成」、「近現代史を重視した内容構成」という3点ととらえた。さらに、現行の歴史的分野の問題点として、学習内容が削減されたなかで、時代区分を大きくとることになったため、「時代の特色の理解」が困難になっている、ということをも指摘した。

2. 「時代」に関する意識・理解の実態－中学生の調査の結果と分析－

東京都内の中学校の3年生を対象として、「時代」に関する意識や理解の状況についての調査を実施した。

- ・調査対象 東京都内の公立中学校3年生(歴史的分野の学習が終了している生徒)
- ・調査実施期間 2005(平成17)年6月27日～7月20日
- ・調査実施地区 19区市、35校
- ・回収した回答数 3,054名

A. 歴史の領域に対する興味に関する調査

日本の歴史の学習内容を7つの領域に分け、それぞれの領域に対する興味の程度を問う。「有名な人物についての学習」が最も興味の程度が高く、「地域の歴史についての学習」と「経済や社会の特色についての学習」が興味の程度が低かった。人物や事件などの歴史的事象が登場する領域（学習内容）に興味を持っていることが分かった。

B. 「時代」に対する興味に関する調査

日本の歴史を9つの時期に分け、それぞれの時期に対する興味の程度を問う。「戦国時代から安土・桃山時代までの学習」が最も興味の程度が高く、「日本の国が統一される頃、聖徳太子の政治から平安時代までの学習」が最も低かった。全体的には、どの時代についても、「興味を持った」「どちらかというに興味を持った」という肯定的な回答が、「興味を持たなかった」「どちらかというに興味を持たなかった」という否定的な回答を上回っていた。とくに、近現代にあたる時期の学習に興味を示す傾向がみられた。歴史的分野の学習が終了した直後の生徒もいるため、歴史的分野全体への興味、近現代への興味が高かったと推測できる。

C. 「時代」順の理解に関する調査

時代順（並べかえ）を、時代区分により3つ設問に分けて問う。前近代の時代順は、正答率58.8%で、「鎌倉」と「室町」の時代順が理解できていない回答が最も多かった。近現代の時代順は、正答率90.5%で、概ね理解できている。「古代、中世、近世、近代」の時代順は、正答率69.8%で、平成10年版学習指導要領の時代区分は、まだ定着していないと推測できる。

D. 「時代」の長さの理解に関する調査

「時代」の期間の長さ（並べかえ）を、前近代と近現代とに2つに分けて問う。前近代は正答率23.6%、近現代は正答率53.0%で、いずれも時代の長さの理解ができていない。とくに、前近代については、「縄文」の長さ、「奈良」の短さが把握できていない。「時代」の長さについては、中学生は、時間をかけて学習した時代ほど長く感じていると推測できる。

E. 「時代」の把握に関する調査

「縄文、弥生、古墳（飛鳥）、奈良、平安、鎌倉、室町、安土・桃山、江戸、明治、大正、昭和、平成」（以下、「縄文～平成」）の選択肢の設問の誤答を分析した結果、「鎌倉」と「室町」の区別がしっかりできていない。とくに、「室町」については、他の時代の事項の誤答として多くの回答がみられることから、「時代」の把握が難しい時代であるといえる。同じように「大正」についても、「明治」や「昭和」の事項の誤答として多くの回答がみられることから、「時代」の把握が難しい時代であるといえる。「室町」の把握が難しい理由としては、政治の動きなどが複雑であること、有名な人物や事件が登場しないため生徒の関心が低いことなどが考えられる。また、「大正」の把握が難しい理由としては、学習内容が豊富なことや、日本史と世界史の学習が交互に行われることなどが考えられる。全体的な傾向としては、小学校で学習している事項や、有名な人物や事件などがキーワードとなっている事項についての正答率は高いと推測できる。「原始・古代、中世、近世、近代、現代」（以下、「原始・古代～現代」）の選択肢の設問の誤答を分析してみると、「原始・古代」や「近世」の事項について「中世」とする回答が多くみられた。「中世」の範囲が認識できていないと推測できる。

「縄文～平成」の設問と「原始・古代～現代」の設問を比較してみると、平均正答率は、「縄文～平成」が55.2%、「原始・古代～現代」が48.5%であった。誤答を分析しても、「縄文～平成」の設問で正答していても、「原始・古代～現代」の設問では誤答が多くみられた。これらことから、「原始・古代～現代」という時代区分は、「縄文～平成」という時代区分よりも、「時代」を把握しにくいと推測できる。さらに、それぞれの設問の正答率を領域別にみると、いずれも「文化」の正答率が高く、「社会・経済」の正答率が低かった。「領域の興味に関する調査」の結果ともあわせて、「社会・経済」は理解しにくいと推測できる。

以上のAからEの調査結果から、現在の中学生の「時代」に関する意識や理解について、次の4点の実態と課題を抽出した。

ア. 「縄文～平成」という時代区分をとる方が、「原始・古代～現代」の時代区分よりも、「時代」を理解しやすい。

イ. 「前近代」の方が、「近現代」よりも「時代」の理解が難しい。

ウ. 「中世」、とくに「室町時代」は、他の時代に比べて「時代」の理解が難しい。

エ. 「政治」や「文化」の領域は、「時代」の理解が比較的しやすいが、「社会・経済」の領域は、「時代」の理解が難しい。

3. 「時代の特色の理解」を重視した内容構成のあり方

(1). 通史的内容構成の意義

歴史的分野の目標が「時代の特色の理解」であり、その目標を達成するためには、通史的構成が適しているというだけでなく、小学校が人物の働きや代表的な文化遺産中心の学習であり、高等学校では日本史を学ばない生徒がいることなど、小・中・高等学校の一貫性という視点から考えると、中学校では、通史的内容構成が必要とされている。

(2). 「時代の特色の理解」の意義

中学校社会科教員と高等学校地理歴史科教員への意識調査の結果から考えると、中学校社会科教員は、中学校の学習において、「時代」の理解を重要と考えているだけでなく、小学校の歴史学習においても、「時代」の理解の基礎となるような事象の理解を望んでいる。また、高等学校地理歴史科教員のなかでも日本史担当者は、中学校において「時代」の理解を望んでいると推測できる。

(3). 歴史的分野における時代区分のあり方

これまでの学習指導要領における時代区分を分析した上で、学習指導要領における「原始・古代～現代」という大きな時代区分では「時代の特色の理解」をとらえにくく、現在の中学生の実態を考えると、「縄文～平成」という小さな時代区分を基本とした「時代」のまとまりをとることが、「時代の特色の理解」のために有効である。

(4). 「時代の特色の理解」の具体化

「時代の特色の理解」のためには、その時代の歴史的事象と、その前後の時代の歴史的事象を比較してその相違点を理解させるべきであるとし、その相違点を理解させるためには、中学生の実態を踏まえると、政治の形態や政策の打ち出し方などの政治上の特色を中心として学習内容を構成することが有効である。

4. 「中世の日本」に関する意識・理解の実態－中学生と社会科教員の調査の結果と分析－

「中世の日本」の学習状況について、中学生を対象とした調査（「時代」に関する意識・理解の調査と同時に実施、3,054名）、教師を対象とした調査（調査対象：東京都国公立中学校社会科教員354名、調査期間：2005年7月4日～8月31日）を実施した。中学生の調査項目は、「学習内容の理解状況」「時代のイメージ」「基本事項の理解」「歴史の流れの理解」である。教師の調査項目は、「生徒の理解状況についての意識」「基本事項に対する意識・授業での扱い方」である。そして、両者の調査結果を比較することによって、次のような学習状況の実態と課題が明らかになった。

(1). 学習内容に対する理解の状況

「鎌倉」の政治の動きに関する学習内容については、生徒は、よく分かったとしており、教師も、生徒が理解しやすい学習内容であると考えている。しかし、「南北朝の争乱と室町幕府」などの「室町」の政治の動きについては、生徒の理解の状況も低く、教師も理解しにくい単元であるとしている。また、「都市や農村の自治」など、社会・経済の動きに関する学習内容についても、生徒は、よく分からなかったとしており、教師も生徒が理解しにくい学習内容であると考えている。

(2). 基本的な人物・事項に対する知識と教師の意識と学習指導の状況

中学生は、「中世の日本」に関する基本的な知識は概ね身に付けているといえる。しかし、「室町」の政治の動きなど、中世全体を大きくとらえることができていない。また、「南北朝の争乱」など歴史的事象が複雑な項目や、「都市や農村の自治」「農業・手工業・商業の発達」など、人物や事件などのキーワードがない項目については理解できていないといえる。一方、教師は、政治の動きに関する人物や事項については重要であると考え、実際に授業でも扱っている。しかし、文化財や社会・経済面の事項については、扱い方に違いがみられる。

5. 「時代の特色の理解」を重視した「中世の日本」の内容構成案の開発

学習指導要領における「中世の日本」の記述内容を分析し、現行の2001（平成13）年検定の中学校社会科歴史的分野の教科書（8社8種類）から基本的な事項を抽出した。さらに、「中世の日本」に関する中学生の理解状況および社会科教員の学習指導の現状を踏まえた上で、内容構成の基礎となる学習内容を設定した。そして、単元構成については、次の3つの視点をもとに作成することとした。

- ア. 中学生の実態調査の結果を踏まえて、「武士」をキーワードとし、「武士による政治の展開」を中心として学習を展開する。
- イ. 時代の転換期にあたる「源平の戦い」や「南北朝の争乱」については、中学生の理解状況を考慮して重点的に取り上げる。
- ウ. 社会・経済の動きや国際関係については、政治の動きとの関連で扱う。文化の特色については、「武士」の気風をあらわす文化財を事例として取り上げて扱う。

6. 今後の課題と研究の方向性

(1). 歴史学習を通して身に付ける能力・態度の育成を重視した内容構成の作成

本研究においては、「時代の特色の理解」を重視した内容構成案を作成したが、歴史的分野の学習では、「時代の特色の理解」だけでなく、思考力・判断力・表現力などの能力や態度の習得も求められている。そこで、歴史学習で身に付ける能力や態度の育成に視点をあてて内容構成を考えることが重要である。とくに、近現代史においては生徒の発達段階や世界史的内容との関連などから考えても、有効であると考えている。今後は、近現代史において、思考力・判断力・表現力を育成することをめざした内容構成案を開発したいと考えている。

(2). 小・中・高等学校の一貫性を踏まえた内容構成のあり方の研究

本研究においては、通史的内容構成をとることの意義について、小・中・高等学校一貫性の視点から論じたが、今後は、具体的に、小学校の歴史学習の特質と高等学校の歴史学習の特質を分析し、それらを踏まえた上で、中学校社会科歴史的分野の内容構成を作成することが重要となる。さらには、小学校と高等学校ともあわせて、小・中・高等学校の一貫性を踏まえた歴史内容構成を開発したいと考えている。

II. 学校等における研修成果の活用計画

①. 内容構成案の授業実践

本研究において開発した、中学校社会科歴史的分野「中世の日本」の内容構成案について授業実践を行い、「中世」という時代の特色をとらえられたかどうかを検証したいと考えている。また、歴史学習で身に付ける能力・態度の育成に視点をあてた内容構成や近現代における世界史的内容との関連を重視した内容構成の開発に取り組んでいきたい。

②. 学会における研究発表

今年度、私は、日本社会科教育学会と日本教材学会の研究発表大会において、本研究の成果の一部を発表した。今後も、本研究の成果をまとめ、社会科教育学会にて研究発表を行い、中学校社会科歴史的分野における内容構成のあり方について、提言していきたいと考えている。

③. 研究団体における研究成果の活用と共有

私の所属する東京都中学校社会科教育研究会や東京都歴史教育研究会、区社会科部会等において、積極的に研究発表を行い、本研究の成果を広く共有していきたいと考えている。

④. 東京都認定講師としての研究成果の還元

私は、平成14年度に東京都認定講師に登録され、これまで社会科教育・歴史教育における研究・授業実践を学校や研究会へ広く還元してきた。今後も、大学院での研究成果を東京都の教育発展のために還元していきたいと考えている。とくに、本研究の中心である「中学生の実態調査」については、小・中・高等学校の一貫性の視点から、小学校社会科および高等学校地理歴史科の研究会等へ、その研究成果を広く還元していくつもりである。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	都立小石川中等教育学校	氏名	関 裕 幸
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻 社会系コース
研究主題	中学校社会科歴史的分野における内容構成に関する研究 - 「時代の特色の理解」を中心として -		
1 所属校での成果活用	現在の所属校である都立小石川中等教育学校は、今年4月に開校した中・高完全一貫の中等教育学校である。したがって、私の大学院での研究成果である「中・高の一貫性を踏まえた歴史的分野における内容構成」を十分に活用できると考える。 そして、現在、中学校1年生の歴史的分野において、次のような視点をふまえた授業実践に取り組んでいる。		
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px;"> <p>○歴史的事象の「発展的な内容」をおさえた学習</p> <p>現在、学習指導要領の内容が身に付いている生徒に対して、より進んだ内容についての学習が求められている。本校においては、学習指導要領における基礎・基本的な事項をおさえるだけでなく、「発展的な内容」を指導計画の中に位置付けている。「発展的な内容」とは 高等学校レベルの内容というのではなく、中学生の発達段階を考慮した、中学校の学習指導要領の内容をより深めたものである。</p> <p>○歴史的事象を多面的・多角的に考察させる学習</p> <p>本校の生徒は、全般的に「歴史知識」を身に付けており、「正答をすぐに求める」学習に慣れてしまっていると考える。高等学校の歴史学習との連携を考える上では、歴史的思考力を育てることが重要であり、特に中学校段階では、歴史的事象を多面的・多角的に考察させる学習が必要である。</p> </div> <p>また、本校は、中・高完全一貫の中等教育学校であるため、6年間を見通した社会科・地理歴史科・公民科のカリキュラム開発が求められている。そこで、次のような教育課程を作成し、それに基づいて授業を行っている。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>1年：地理的分野(2) 歴史的分野(2)</p> <p>2年：地理的分野(2) 歴史的分野(2) * 3学期から公民的分野の一部を学習</p> <p>3年：公民的分野(2) 世界史(2)</p> <p>4年：倫理(2) 世界史(2)</p> <p>5年：政治経済(2) 地理Aまたは日本史Aを選択</p> <p>6年：選択科目 世界史B・日本史B・地理B・倫理・政治経済を設定</p> </div>		

<p>2 委員 会 ・ 研 修 会 で の 成 果 活 用</p>	<p>○公開授業 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施日 5月13日(土) ・参加対象者 小石川中等教育学校及び小石川高校保護者、一般参観者 ・授業内容 高等学校日本史A 「日本の開国」 中学校地理的分野 「地球上の位置(緯度・経度)」 <p>○公開授業 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施日 10月7日(土) ・参加対象者 小石川中等教育学校及び小石川高校保護者、一般参観者 ・授業内容 高等学校日本史A 「文明開化」 中学校地理的分野 「日本の地域区分」 <p>○授業公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施日 10月12日(木) ・参加対象者 岡山県 中・高一貫校開設準備担当者 ・授業内容 中学校歴史的分野 「奈良時代の農民の暮らし」 <p>○研究発表会講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施日 10月20日(金) ・内容 町田市研究発表校(町田市立鶴川中学校)の講師 * 中学校歴史的分野「中世の日本」の授業に対する指導・助言
<p>3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業</p>	<p>東京都教育委員会を通して、デンマーク国営放送(テレビ局)から日本の中学校の歴史の授業の参観及び取材を受けるにあたって、研究授業として設定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業実施日 5月31日(水) 2校時 ○ 参加対象者 デンマーク国営放送関係者5名、本校職員6名 ○ 授業内容 中学校社会科歴史的分野「国の成り立ち」 ○ 研究授業の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・ 東アジアの動きを背景にした国家の統一過程の理解 ・ 討論活動による多面的・多角的な見方の育成 ・ 実物資料の活用による興味・関心の育成
<p>4 今 後 の 活 用 計 画</p>	<p>○授業改善の視点</p> <p>歴史的な事象について多面的・多角的に考察させることなど、生徒自身のものの見方・考え方を育てるための基礎的な力を身に付けることは、中学校段階では大切なことである。今後は、高等学校の歴史学習との連携を踏まえ、歴史的な事象に対して、生徒に自分なりの考え方や捉え方(評価)をもたせる学習活動を取り入れていきたいと考える。</p> <p>○中・高一貫性を踏まえた歴史カリキュラム</p> <p>本年度は、6年間を見通した教科・科目の大まかな教育課程を作成したが、今後は、その教育課程に基づいた詳細なシラバスを作成することが必要である。そして、本校の中・高一貫の6年間の歴史カリキュラムを、全国へ発信したいと考える。</p>